

4 ヒペリカム・カリシナムのさび病の有効薬剤

ねらいと成果

ヒペリカム・カリシナムはオトギリソウ科の低木本植物で、道路の法面や公園の植栽などに多く用いられており、県内のグラウンドカバープランツの主力品目として栽培されている。近年、育苗期に発生するさび病が、栽培上の大きな問題となっている。そこで他の作物のさび病に有効な薬剤を用い防除効果を検討した結果、ヘキサコナゾール等4剤が高い防除効果を示した。

内 容

篠山市の現地ほ場（ビニールハウス6m×30m、無加温）で試験を行った。薬剤は、アゾキシストロビン（アミスター20）フロアブル1500倍、ヘキサコナゾール（アンビル）フロアブル1000倍、トリホリン（サプロール）乳剤、トリフルミゾール（トリフミン）水和剤1000倍、ミクロブタニル（ラリー）乳剤3000倍を供試した（展着剤はアプローチ BI を加用）。10月21日、11月2日、11月12日、11月29日の4回、1区（1トレ-28株）につき200mlの薬液をハンドスプレーで散布した。調査は11月2日、11月12日、11月29日、12月13日の4回行った。各試験区とも30株を任意に選抜し、最長茎の20葉について発病程度を調査した。発病度の算出方法は次のとおりである。

$$\text{発病度} = \Sigma (\text{程度別発病指数} \times \text{葉数}) / 4 \times 100$$

- 指数4：発病面積が75%以上
- 指数3：発病面積が50%以上75%未満
- 指数2：発病面積が25%以上50%未満
- 指数1：発病面積が25%未満
- 指数0：発病無し

無処理区では、最終調査時の発病度が25.2と中程度まで増加し、防除効果を判定するのに十分な発生量となった。

最も優れた防除効果を示したのは、ヘキサコナゾールで最終調査まで発病を完全に抑制した。次いでトリホリン、ミクロブタニル、トリフルミゾール3剤は、防除価96以上と極めて高い防除効果を示した。そのうちトリホリン、ミクロブタニルは2回目（11月12日）散布後でも十分効果があったが、トリフルミゾールは2回目散布後では効果がやや劣った。アゾキシストロビンの効果は、総じて上記4剤よりやや劣り、特に3回目散布後17日経過した11月29日の調査時での発病が目立った。なお薬害は認められなかった。

今後の方針

薬剤耐性菌の発生を防ぐため、薬剤のローテーション散布や耕種的防除法を検討する。また、薬剤の散布時期や散布間隔などを検討し、効果的な施用法を確立する。

藤田 茂之（洲本農林水産事務所）
（旧 病害虫防除所）

表 さび病に対する薬剤の防除効果と発生推移

薬剤名	発病度（防除価）			薬害
	11月12日	11月29日	12月13日	
アゾキシストロビン	2.7(71)	6.4(60)	2.5(90)	—
ヘキサコナゾール	0.0(100)	0.0(100)	0.0(100)	—
トリホリン	1.8(81)	1.2(93)	0.1(100)	—
トリフルミゾール	3.5(62)	1.0(94)	0.7(97)	—
ミクロブタニル	1.6(83)	0.8(95)	0.3(99)	—
無処理	9.3	16.2	25.2	

$$\text{防除価} = (1 - \text{処理区の発病度} / \text{無処理区の発病度}) \times 100$$